

多摩川源流体験教室

～未来を拓くたくましい子どもたちのために～

多摩川源流研究所

(1) はじめに

～源流にこだわり源流を活かした村づくり～

小菅村は、多摩川の源流部に位置し、社会的、経済的、文化的に奥多摩町や青梅市、昭島市、福生市、府中市、狛江市、大田区、川崎市など多摩川流域との結びつきが強いのが大きな特徴です。また、村内には明治34年に経営が始まった東京都水道水源林が存在し、清浄な流れと豊かな水を流域へ届け、流域住民の生活や暮らしを支えてきました。小菅村は、こうした地勢の特徴を踏まえて昭和62年に、多摩川の源流に小菅村があることを広く周知するとともに子ども達に源流への誇りを育むために、「多摩源流まつり」を開始しました。

さらに小菅村は、21世紀を迎えるに当たって、村の将来像を検討し、多摩川源流という地理的条件を踏まえて、「源流にこだわり、源流での生活を謳歌できる村」を目標とする第3次総合計画を平成12年3月に策定しました。小菅村は、その総合計画を具体化するために、源流にこだわり源流を活かした村づくりのシンボルプロジェクトとして、村づくりのシンクタンクとなる多摩川源流研究所を平成13年4月に設立しました。

源流研究所は、設立以来11年間に渡って(1)源流資源の調査・研究とそのデータの蓄積、(2)会報「源流の四季」の発行など情報の発信、(3)交流人口の拡大をめざした上下流交流・連携の推進、(4)森林再生プロジェクト、(5)源流ネットワークの形成の5つを柱にする活動

を展開してきました。また、平成19年5月には、東京農業大学による現代GPプロジェクトによって多摩川源流大学が開学し全国的に注目を集めました。続いて小菅村が平成20年21年に取り組んだ「源流元気再生事業」(内閣府支援事業)を通して村づくりの新しい担い手であるNPO法人多摩源流こすげ(平成21年11月)が誕生するなど、源流にこだわった村づくりが大きく進展しています。ここでは、源流研究所が最も力を注いできた事業である「源流体験教室」の内容を紹介します。

(2) 大きな反響を広げた「源流体験教室」

～新鮮な感動と得がたい喜びを提供～

私たちが平成13年から開始した「源流体験教室」が我々の予想を超えて大きな反響を広げています。その理由は、参加した親子に新鮮な感動と得がたい喜びを提供できていることにあります。「こんな素晴らしい自然に出会えたのは初めてである」と興奮気味に語ってくれる親子の姿を目の当たりにして、様々のことを考えさせられました。私たちは、50年後、100年後の子供たちに、今の日本で何が残せるのだろうか、何を残したらよいのだろうかを真剣に模索し、さらに、今の子供たちに何を伝えたらいいのかも併せて思案してきました。

私たち自身が源流に出会えて感動してきたそのまゝの内容と体験を親子に提供しよう、親子自身の体験を通して源流からのメッセージを体全体で受けとめて



ぶかぶか流れる



やったぜ



堰堤で滝修行

もらおうと考え、源流のありのままの自然に触れられる「源流体験教室」を企画し取り組んできました。これまで取り組んできた「源流体験教室」の経験と蓄積を整理し、「源流体験教室」の目的、「源流体験教室」の特色、「源流体験教室」の実際、「源流体験教室」の将来像などについて報告します。

(3)「源流体験教室」の目的

～自然を理解し自然への感謝の気持ちを育てる～

近年、子育て中の親もそして学校で学ぶ児童・生徒も自然体験の機会が少なくなっています。子供たちを取り巻く環境は大きく変化し、少子化と核家族化が進展する中で子ども達は家族や社会の中でもまれる機会が減りつつあります。こうした中、豊かな自然体験は子供たちの健やかな成長と自立精神を育み、自然や友達を思いやる気持ちを育てるうえで重要な役割を果たすものと考えます。

多摩川源流は、清らかな流れと深い森に包まれた自然の宝庫であり、首都圏の水瓶として流域の人々の暮らしを支える大変重要な役割を果たしています。この場に自然環境学習の原点ともいえる「源流体験教室」を創設し、源流に直接触れる体験ゾーンを整備し、水辺の楽校や児童館、育成会や親子で豊かな源流を体験できる場所と機会を設けました。日常の世界から離



何か飛んだかな

れた別世界とも言うべき源流との出会いは、子供たちの心にえがたい感動と新鮮な喜びを刻み、源流体験を通して水や川や森など自然環境に対する理解と関心を深める絶好の機会となると考えました。

源流体験教室では、次の6点を「源流体験教室」の目的として実施しています。

1) 源流に感謝する、自然とゆっくり向かい合う（感謝）

この一帯は東京都の水源地であり、地元の人々も水や森を我が子のように大切に接しています。それ故、水や川や森を大切にする人々以外は、この深い渓谷に踏み入ることは認められていない神聖な場所です。自然とゆっくり向き合い、源流の姿を自分の心に焼き付けていきます。そして、澄みきった水や豊かな森が広がる源流に対する心からの感謝の気持ちを育んでいきます。

2) 源流を知り、源流と親しくなり自然を愛する心を育てる（理解）

源流体験のねらいは、源流を良く知ることです。自分の目と耳と足でまずよく観察します。水の色、水の冷たさ、川の姿とその営み、淵の形、淵の名前、瀬やトロ、谷の特徴、ヤマメやイワナなどの溪流のサカナ、木



滑らないように



観 察



間伐の重要性を伝える

の形、葉の形、幹の太さ、鳥の鳴き声、コケの姿、山野草などをありのまま観察します。未知の源流との遭遇は、子供らに驚きと感動を与え、たとえたった一回の経験でも源流が心に深く刻まれ決して忘れることはないでしょう。また、水が命を育てお互いが支え合って生きている姿を知ることを通して源流と親しくなり自然を愛する心を育てていきます。

3) 厳しい源流を、自分で判断し自分の力で歩く(自立)

源流には道はありません。どこを歩くか自らがよく観察し、自分の歩く道を自分で決めます。自分の力を信じて、失敗してもいい、転んでもいいから自分のことは自分でやりとおします。他人の助けなしで、自分の力で物事を行っていく体験を通して自信と自立心を育てます。

4) ワクワクする好奇心とヒヤヒヤする冒険心を育てる(意欲)

源流の自然の素晴らしさに触れれば、心がさわやかになり、源流からたくさんのエネルギーやメッセージをもらうことができます。人それぞれに感じ方や受け止め方は違っても、この豊かな自然をずっと残していきたいと誰でも願うでしょう。また、変化に富んだ険しい源流を歩くことでワクワクする好奇心や冒険心が芽



岩場を渡る

生え、未知の世界への挑戦と意欲がもてるようになるでしょう。

5) 危険と向き合い、自己責任と忍耐を身につける(責任と忍耐)

源流はどこにでも危険が潜んでいます。自然は美しいが厳しい。油断するとすべって転び、ケガをしたり痛い思いをします。まず、自分の安全は自分で守ることが基本です。小さな危険を体験し危険と向き合うことで大きな危険を未然に防ぐ経験を積んでいきます。また、源流域では、参加者の安全確保のため、指導者の指示に必ず従うことが求められます。こうした訓練を積み、ものごとに耐えていく力を身につけます。

6) お互いに支え合う協調性と友達を思いやる気持ちを育てる(協調と思いやり)

危険な場所で悪ふざけをしたら大変なことになり、自分勝手な行動は重大な事故を招くことになります。危ないときは、周囲にすぐに知らせることの大切さを学んでいきます。源流の自然は厳しいので自分の手に負えないことが多い。体験を通して助け合いの気持ちやお互いに協調することの大切さを学んでいきます。



岩場を渡る



岩場を渡る



橋の上から飛び降りる



小菅村中心部を望む

(4)「源流体験教室」の場所と3つの特色

～ホンモノに触れ日本の自然の素晴らしさを心に刻む～

小菅村と源流研究所、NPO法人多摩源流こすげが、源流と流域の交流事業の柱として取り組んでいるのが「源流体験教室」です。ご承知の通り、川に学ぶ活動が大変盛んになっていますが、私自身も生まれは九州宮崎で、実家の近くを流れる大淀川で遊び、鍛えられ、本当に川が大好き人間に育ちました。子どもの頃に川にどれだけ触れる機会が持てるか、これが非常に大切だろうと思っています。山梨に来て、多摩川源流に接し、「この源流はふる里の川よりもっと水が澄んでいるな」と大変感動しました。そこで、この源流の本物の川を流域の親や子どもに触れさせようじゃないかということから「源流体験教室」を開始しました。

今、日本の子どもの中で日本の自然の素晴らしさに感動し、四季の移り変わりや豊かな自然が心に焼き付いている子どもが何人いるだろうか。親たちだって、自然体験が少ないなか、日本の自然は素晴らしいと子どもたちに自信を持って伝えられる親がどれくらいいるのかなと大変不安になっています。そこで、親や子どもたちを源流域のV字谷に連れて行こう、源流を体全体で体感できる機会を提供しようと計画したのが源

流体験の始まりです。そして、どこに源流体験の場所を設定するか真剣に検討しました。

源流域には、お隣の甲州市の一ノ瀬溪谷や丹波山村の丹波溪谷といって、その溪谷に足を踏み入れたら帰ってこれないかもしれないほど険しい場所がたくさんあります。そんなところに子供たちを連れて入れません。体験にふさわしい場所を求めて源流域を歩き廻っていたら、やや小振りなV字谷で、足を折ったり捻挫したりするかもしれないが、命を失うことはないという場所、小菅川の源流に出会いました。環境学習をするには命の保証は絶対条件ですから、小菅川源流は親しんで近づける川だと判断しまして、ここに「源流体験教室」を創設しました。

「源流体験教室」の特色は、三つあります。

一つ目は、源流という神秘的な美しさをもつ自然を体験させホンモノの素晴らしさを実感させ、感動を共有することです。ホンモノを知らなければニセモノは分からないからです。

二つ目は、人間生活の原点である「自分の安全は自分で守る」という、人間としての生き方の原点を体験することです。スタッフは親子を見守ることに徹します。転んでも手出しはしません。「自分のことは自分でやる」スタイルを貫くことを基本にしています。



植物の説明



深い所も



川の役割の説明

三つ目は、源流の美しさと厳しさを子供たちの心に刻むことです。この体験は、他の体験では絶対にえることのできないものとして彼らの心の財産として永久に記憶に残ると確信しています。本物に触れるということは、心を揺さぶるということです。

(5) 源流体験教室の実際について

～今日はケガをします。痛い目にあいます。～

現地では、源流体験をはじめるに当たって、まず、源流にきた子どもたちにヘルメットをかぶせます。親も教師も全員かぶります。これだけでかなりの緊張が走ります。そして参加者に向かって指導者が「今日はケガをします。転んだり、痛い目にあいます」と切り出すと、付き添いの先生方の顔が曇るが、気にせずに進めます。「源流には道がありません。どこを歩くのが良いか自分の目で判断して、自分の力で歩くこと。今日は親や先生に頼らないし、親も先生もみんなを助けてくれない。人生で一番大切なことは自分の安全は自分で守ること。ここではその人生の原点を体験する。自分の力を信じて元気に歩こう」と呼びかけ、源流には入っていきます。これが源流体験の作法です。源流に向き合うということは、小さな危険に向き合うということです。この覚悟なしに源流には入れません。

いよいよ源流を渡り始めるとき、「どこを歩けばいい



淵へ飛び込む



足場が悪くても

か、川の流れをよく観察すること。水の中では足はすり足にし、歩幅を小さく取ると転びにくい」とアドバイスして見本に渡って見せます。一人一人に体験させるが、子ども同士の助け合いは自然の成り行きに任せます。1回でも渡りきると子どもの表情が変わります。少し歩いたところで、苔を前にして「河原に苔があることは、この上流の森が豊かな証拠です。何故だろう」と話しかけます。「この苔たちは、1ミリ伸びるのに1年かかる。この1センチの苔は、もう10年間の営みを積み重ねているよ」と話してあげると、子ども達の苔を見つめる眼が優しくなります。

<自然の美しさと厳しさを知る>

さらに上流に歩くと、長い歳月をかけて川が作ってきた地形に出くわします。「これが淵ですよ」「これが瀬ですよ」と話しかけていきます。また、この淵にはこんな名前が付いているが、その由来はこうですよと話します。そして、川に迫り出した大きな岩の前に立ち止まって、「ここをよく観察しなさい。川面から2メートルの高さに大きくえぐられた跡がある。この岩を誰が一体これほどに掘ったのだろうか。この上流を見てごらん。約60メートルが直線になっている。50年100年に一度の大洪水の時には、水位が2メートルも3メートルも上昇して、大きな石を巻き込んだ濁流が、この岩を直撃してこの爪痕を残したんだよ。自然は、綺麗で美しいが、激しくて怖いということも心に留めて置くんだよ。川とうんと仲良くなって欲しいが、川を決して甘く見てはいけないよ」と語りかけます。子供たちの顔は真剣そのものです。

その上流の釜淵では、右岸は比較的安全なコース、左岸は岩にへつりながら進むチャレンジコースが待っています。それぞれのコースを説明して、どのコースを取るかは自分で決めなさいと、判断を彼らに任せます。ヒヤヒヤドキドキのコースに挑んだ子供たち。自

分の力にあったコースを選択した子どもたち。それぞれが、最後の淵に着くと、天然のヤマメを箱メガネで覗いたり、岩の上から飛び込んで泳いだりと、源流の流れを心ゆくまで楽しんでいます。

そして、源流体験の最後は、豊かな森との対話です。うっそうとした森の中で足踏みさせます。フワフワした土壌の上で「森は毎年大量の葉と実を付け、秋になると土の上に落ちます。雪や風で枝も落ちます。この葉と実と枝がこの腐葉土を作ります。この森の土が雨を浸透させて、保水し貯え沢となって流れます。森と川はつながっています。水は命、森は源、川はきずなです。みんなで一緒に水は命 森は源 川はきずな」と繰り返します。

<源流から勇気をもらいました>

体験して、「こんなに水が冷たいとは初めて知りました」「目の前を流れる川の水を飲んだのは生まれて初めてです。川は生まれたときこんなにきれいなんですか」と、子どもたちや親は感想を寄せてくれます。一番感動しているのは、お父さん、お母さん方です。あるお母さんは「初めての源流体験でした。空気の冷たさを顔や体で感じ、水の冷たさを靴のなかの足で感じました。立ち止まって川の音を聞きながら、眼で岩や木、水の色、石の形を見ては川の静かな顔と強い顔を見ることが出来ました。スタッフの話聞いて『瀬』『淵』を見ると、自然は無限の力で生きているんだと感じ、源流から勇気をもらいました」とその感動を伝えてきました。

また、ある親は「水と花と木と空気が一体となって、子どもとともに童心に返れました。子どもたちの目の輝きがとても素晴らしかったです。何回も続けてください」「家族五人での参加でしたが、子どもたちも親に頼ることもなく、歩き通したくましく見えました。源流の水の冷たさや周りの苔の様子など普段感じることの出来ない体験ができ、本当に参加してよかったと思います。来年も参加して泳ぎたいと思います」と源流域の自然環境への親しみと共感をしみじみ語ってくれました。

<未来を担う子供らへ源流からのメッセージ>

源流というのは、日本国中にありますが、実はそこは過疎と少子高齢化で悩んでいます。全国各地の源流の村はどこでも過疎に悩んでいます。この源流の自然を活かして、次の世代を担う子どもたちに、この日本の素晴らしい源流を知って欲しい、一緒になって森を

守る、川を守る、こういう活動に取り組んで欲しい、そういう願いを込めて「源流体験教室」を追求しています。嬉しいことに、小菅村では多摩川源流大学の地元事務局と若い地域おこし協力隊が、NPO法人多摩源流こすげのスタッフとして源流体験の運営を担い、指導者として活躍しています。彼らの元気な活動は、源流体験の輪を流域へ大きく広げる原動力になっています。

私たちは、今後とも源流域の調査研究を通して、源流の宝物に一層磨きをかけていきたい、源流と流域との交流を盛んにして、源流の里の賑わいを取り戻したい、少しでも小菅村のために源流のために、さらには未来を担う子どもたちのために役に立てたら有り難いと希望しています。

私たちは、源流体験に取り組んだ子供たちの心に源流の流れが深く刻まれていると確信しています。これからも、未来を担う子ども達へ源流からのメッセージを伝え続けていきたいと思います。

源流体験教室の実績

平成13年度	源流体験教室モデル事業開始	
	2団体参加	(105名)
平成14年度	11団体参加	(737名)
平成15年度	20団体参加	(1538名)
平成16年度	21団体参加	(1545名)
平成17年度	18団体参加	(1529名)
平成18年度	18団体参加	(1521名)
平成19年度	19団体参加	(1533名)
平成20年度	22団体参加	(1582名)
平成21年度	24団体参加	(1611名)
平成22年度	25団体参加	(1652名)
平成23年度	28団体参加	(1764名)
計	208団体参加	15,117名

多摩川源流研究所 所長 中村 文明